

大地

第 36 号
2011. 2. 10. 発行
浄 國 寺
上越市寺町3-14-10
☎025-523-5724

ウサギの年に



今年の年賀状に、さくらももこの詩『きもち』を添えました。そうです、さくらももこはマンガ『ちびまる子ちゃん』の作者。

やさしい気持ちは／ふわふわしてる。
こわい気持ちは／ふるふるしてる。
さみしい気持ちは／ほそほそしてる。
うれしい気持ちは／ピョンピョンはねる。

本年は卯年、ピョンピョンはねるウサギ。ところで、ウサギは十二支の一つにあるように、ふるくから人に近い存在でした。そのため「因幡の白兔」「ウサギとカメ」あるいは「ピーターラビット」等、説話や物語に多く登場しています。

仏教でも説話集ジャータカのなかに「月へいったウサギ」という物語があります。物語りの簡単なあらすじは、つぎのとおり

『むかし深い森に、ウサギと山犬とカワウソとサルが仲良く暮らしていた。4匹の動物たちは、常日ごろから「困った人がいたら助けてあげよう」と話していた。

ある日、森へ空腹で歩くことすらままならぬ旅の僧がやってきて食事を希うた。そこで、山犬は肉を、カワウソは魚を、サルはマンガーを差し出した。ウサギにはさしだす食べ物は何も無い。途方に暮れたウサギは、旅の僧に火をおこしてくれるようにたのみ「わたしの肉を食べてください」と火の中に飛び込んだ。

その時、旅の僧はみるみるうちに帝釈天の姿に変わり、ウサギに「そのやさしい心と行いが世界中に広まるよう、月におまえの姿を印そう」と告げ帰って行かれた。

その夜4匹の動物たちは、ウサギの映った月を見ながら「明日からも施しをしていこうね」と笑ってうなづきあった。』

このウサギの行いは、童謡に歌われる「十五夜お月さまを見てはねる」ウサギとは違い、胸がドキドキさせられます。そして読む人がこのお話から、どのようなことを感じとるかはそのそれぞれです。

仏につかえる者への布施行為を説かれたお話、さとりに通じる善行(ぜんぎょう)を教えられたお話、尊い自己犠牲の精神を勧めるお話、地獄と極楽のお話等々

私たちは今、ありあまる豊かな物に恵まれ、テレビやネット等による溢れる情報のなかで生活しております。

一方、「競争原理」「スピードの勝負」等と呼ばれる社会のなかで生活しております。心の病に苦しむ人、さらには自死する人が急増する現代、「月へいったウサギ」のお話は、一つの警鐘かも知れません。

うれしい気持ちは／ピョンピョンはねる。本年もよろしく願います。

俳句

山崎 睦

夜の雪も朝の光りにとけそめぬ

籐椅子に二匹重なる蓮と華

※蓮と華は犬の名

初雪や参道はやも消えそめし

水芭蕉あいだつるつる清き水

睦(母)は、ここ数カ月で心身の衰えが著しく進み、自ら句を詠むことが難しくなりました。

前掲の句は、ベット脇でようやく聞き取りしたものです。(隆昌)

死する処

子安新田 羽深弥寿子



一軒だけ庭木のあいだに大根を干す家がある。その家は葉と葉をヒモで結わき、棒にまたがせてぶら下げる。干したばかりだと水々しくてふっくらしているの、若さっていいなあ、と相手が大根なのにつぶやく。

ある朝、うす汚れたノラが門柱のところにあられた。前足を門柱にそえて立ち上がり、首、わき腹をこすりつけていた。

昨夜帰宅時にみつけて声をかけそこなったヤツかもしれない。霧雨がやみ、黒々と湿った地面にお帰りといわんばかりに白猫があらわれ、ふり向きざまに私を追い越して姿を隠した。隠れた白は大根の白肌のように目に残った。

毛並みはべたついて湿り気を帯び、黄ばんで見えた。

花壇の冬支度をしている私を切れ長の目で戦いを挑むように睨みつけ、低い姿勢で前のめりに首を下げ、一步また一步と近寄り、前足をそろえてしっぽを巻く。その前足は箱入り娘のように華奢で小さい。数年前から顔をみせてくれた猫にご褒美としてマタタビを与えていた。近所の猫ではないと思った。

花壇の土を入れるバケツに前足をかけ、な

かに金魚がいるみたいに覗きこむ。私の視線を感じて猫がふり向く。あそびにきたの、と声をかけたとき顔を見合わせた。返事がな。作業をつづけていた私の尻に、わき腹ですり寄ってきたが、しばらく構わずようすをみる。華奢な足をそろえ作業の終わりを待っていたが、待ちきれないよう、作業をする手に絡み着いてきた。首輪はないがノラではないと思った。マタタビを与え、飼い主が心配しているから帰らなさい、と言いつ聞かせた。白猫は聞きわけたかのように尻を向け、門柱の方に歩く。その姿は老いを隠せず、男でも女でもなく、苦楽をかみしめた一見威厳すら漂っていた。

翌朝のことである。出勤時に玄関のカギをかけていると、わきの物置からまぶしげに不細工な顔で出てきた。帰らずに泊まったようす。マタタビを与えて仕事に向かった。帰りぎわ、猫がいたら与えようと小袋のエサを買った。玄関のカギを開けたら、わきからよろよろと出てきた。まだ帰らなかったの、と声をかけながら、この猫は死に場所を探してきたのだと思う。食べる姿には覇気がない。水の飲み方も勢いがいい。着古したセーターを物置に敷いた。

三日目、浴槽のあまり湯で体を洗う。三回目でやっと白い毛が輝き、若々しく見えた。汚れのひどさからそうとう遠くからきたと察

した。また汚れは歳や老いを増してみえることに気づいた。拭き終わった耳は紙のようになうすく、葉脈みたいな毛細血管が透けて見えた。幸がうすそうなので「うすこ」と名づけた。無口なヤツだが、うすこと声をかけると細い目をより細くして返事を返した。

室内に招くが物置に向かう。縁側をアクリル板で囲い、アンカで温めた。寒くないように赤い綿入りジャンパーを着せた。ジャンパーは背中白い大きな足跡がプリントされていた。小犬用のため足を出す位置がちがいで、よけいヨタヨタ歩いた。仕立て直して着せると赤い色が白い毛並みに映えて、注文したかのようによく似合った。ソフトバンク犬に似ている。

二年前のことである。

うすこは日に日に元気を取り戻し、ノラを睨みつけ蹴散らした。あそびに興じて庭を駆けずりまわった。マッサージをすると手足を思い切りのばし、体をころころと転じ、顔をほころばせた。二日帰らないときがあった。首輪につけた大小六個の鈴がシャンシャンシときこえる。その音は遠くに行かず、弾むように家の近くを闊歩し、若い猫の足の運びを思わせた。

何か察知したのか、うすこは足しげくトイレに通い、一切ものを口にしなくなった。二日後、居間のホットカーペットで眠るように

亡くなった。息を荒立てることも排泄物を残すこともなくすうっと命をしまい込んだ。

長旅の果てに死にふさわしい場所をみつけた。ところが思いがけず、旨いものを食べマッサージされた体によるこびりが満ちて来た。もう少し生きようかと思つたに違いない。

ほんとうは寿命が尽きかけ門柱にあらわれた時、近寄りたいたいほどの威厳があつたのはそうとうの覚悟があつたからだ。

赤いジャンパーを誇らしげに着て、そろえた前足に頭をのせ尾を体に巻きつけて最後の息を吐き出した。そこに来て座つた場所、そこが死する処だつた。死を受け入れた死に方を論じてくれた。――六月十八日

お固い緊急放送

山崎隆昌

秋の日の昼近く、遠くに消防車のサイレンの音が聴こえてきた。音は次第にわが家に近づいて来る。火事は近らしい。テレビのスイッチを入れ、緊急放送チャンネルに合わせると、聞き慣れた男性の声が流れて来た。

「こちら上越消防本部です。ただいま上越市仲町六丁目三〇、浅溪院方立ち木付近で、その他火災発生の模様、詳しいことは不明です」(耳に残る私の記憶)

放送では、このメッセージが鎮火まで何度と

なく繰り返し返される。

浅溪院は仲町にある曹洞宗の寺院で、わが家から直線で数百メートルのところにある。

放送を聴き「されば状況は如何」と二階の窓から仲町方向を覗いたけれど何も見えない。

おそらく境内地の立ち木が何かしらの原因でほんの少し燃えたのであろう。大事にいたらずよかつた。

しばらく時間が経過してから、先ほどの緊急放送を想い出し思わず笑ってしまった。

地方のケーブルTVから流されるこの緊急放送では、発生の場所を必ず「〇〇付近」とする。付近とするのは、火災通報のみで消防本部では放送時に確認できていないためか。

それにしても「立ち木付近」の表現は落語のようでおかしい。目印にされた立ち木も困惑した事だろう。せめて「浅溪院の付近」と放送すべきと思うのだが。

火災についても「その他火災」と言われても解る人はいない。僕など「その他」と言うのと、重要な人達がいる、その他大勢という印象が浮かぶ。「立ち木が燃えているもよう」では駄目なのか。火災の分類から「建物火災」

「芝火災」「山林火災」などあるのだろうか。放送は、火災の場所と種類を入れ替えるだけの定型文。定型は、素早く正確簡潔に？というためなのか。それにしても、なかなかお固い緊急放送である。状況に合わせ弾力的に

というのは、やじ馬のいらぬ世話か。

ところが、よくよく自らのことを考える時、この緊急放送を笑うに笑えないものがある。

例えば老人福祉の現場においても、これと似たようなことを自分で行ってきたのだ。現場では物事を間違いなく進めるために「約束事」「作業手順」「マニュアル」等が多く作られる。それが油断すると「作業手順」のための「作業手順」となり「マニュアル」のための「マニュアル」となるのだ。

組織の中で仕事をする場合、決められた通りに行う「形」が大切であることは言うまでもない。だがともすると、大事な中身を実現するためにあるはずの形が、内容に形が優先してしまふことがある。

さらに尤もらしく言えば、今日浄國寺で行っている、毎日のお勤めや、年中行事などは、この「緊急放送」と同じことをしてはいないだろうか。と自ら忸怩たるものがある。汗顔するばかり

それにしてもテレビの緊急放送とは便利なものである。その以前、夜中に半鐘やサイレンが鳴ると「何処が火事か」心配でビクビクしたものだつた。

それ故にこそ、この便利さに油断無く処していきたいと思う。

ワン公のシヨートステイ

山崎慎子



ウチには二匹の飼いだが入る。困ったような顔をしたメスのパグ犬である。この六月で十一才と四才になる。

一般的に犬種による性格ということが言われるが、二匹を飼ってみて、犬も人間と同じく、個体それぞれの性格の違い（つまりは個性）なのだということを思い知らされている。

蓮はおっとりとして穏やか、華は活発な暴れん坊。車に乗せると性格が入れ替ったように、蓮は四六時中落ち着かず、華はでんと構えて坐っている。散歩で他の犬と出会った時でも、蓮はムキになって飛びかかろうとするし、華は全くの我関せずで知らんぷりである。

この二匹、一泊や二泊のシヨートステイは、これまでも何度か経験済みなのだが、昨年の秋、一週間のシヨートステイをすることになったのだ。

それは、長い間夢見ていた台所の改築が急に具体化し、ついでに隣接の土間や茶の間（ワン公の居間でもある）も少し手を加えようということになり、工期一カ月程。その間でできれば二三日ワン公は他所に、ということに決まったのだ。

幸い、K子さんという動物を扱うのが天才

的に上手な人がいて、これまでも幾度も面倒を見て貰っているので、ワン公達もK子さんのことは大好きである。

K子さんは以前、同時に三匹の犬を飼っていた。いずれも何かの理由でK子さんの所に持ち込まれた犬達だったと思う。ある時は交通事故にあつてケガをしたらしいタヌキが持ち込まれ、ある時は巢から落ちたものか、飛べない雀の子を育てた。片目がつぶれ、片足を傷めたカラスに、カアちゃんと名付けて何年も面倒を見ていた。

それを知って、いろんな人がいろんな生き物を持ち込む。K子さんはいよいよお手上げになると、その生き物を獣医さんに連れて行く。獣医さんがあるとき「K子さん、いろんなの連れて来るねエ。でもへびだけはやめてネ」と、言われたそうである。

今、K子さん家には白い柴犬の「ひめ」が暮している。K子さんの車の助手席は「ひめ」の指定席になっていて、フェンスで囲い、チャイルドシートよろしく安全の上ないスペースに造つてある。

そういうK子さんが面倒を見てくれるので彼女の姿を見ると、蓮華どもは狂喜するのだ。ちょっと私達が鼻じらむくらいに。

しかし、この度はいくら何でも長すぎて華「ネエ、お姉ちゃん、アタシ達もしかしたら捨てられちゃったんじゃない？」

蓮「ウン、そうだったら悲しいねー」

なんて思われたら可哀想。少し長くなりそうだと分つて三日目、私は面会に出かけた。

華は若いだけに、すぐ飛んで来て跳ねながらまとわりついてくる。年老いて少々反応の鈍くなった蓮は、しばらくドヨンとしているやゝあつて尻尾ふりふり寄つて来て、ひとしきり甘えた後、スタスタとK子さんの側に行き仰向けになって、なでなでしてと甘えたのには、少々ガツカリさせられてしまった。

丸一週間後の夕刻、ころげるように帰宅したワン公達。蓮はトイレに突進して排せつをたっぷりして「あゝワタシ達、ここんちの子だったんだ」という風情。まずは年長に敬意をと思い「蓮、帰つて来たね。いい子いい子となでているのを、気の強い華は「フン！」とにらんで「華、おいで」といっても、こちらを挑発しながら逃げ回っている。

久しぶりに味わうワン公達との戯れの時間である。翌朝の散歩、連れて出た夫によれば最近、散歩を拒絶気味だった蓮が、足取り軽く楽しそうに歩いたと言う。

一週間、ワン公の毛も飛ばず、やや清潔だった茶の間が翌朝からは又、排せつを始末し、ワン公の毛に煩わされる日々に戻つたが、ワン公達の困つたようなご面相が小首をかしげると、「ま、これも良いかー」とヤニ下がってしまふ私達である。